

平成27年度
工学部ファカルティ
ディベロップメント報告書

平成28年12月
茨城大学工学部

はじめに

茨城大学工学部の母体である官立多賀高等工業学校は、日立製作所の支援と茨城県の協力のもとに、我が国の工業振興と茨城県における工業教育の充実を目的として昭和14年に設置されました。それ以来、地域を拠点に人と自然環境に調和したイノベーション創発と高度科学技術の実践を目指して教育研究に取り組んでいます。教育では、基礎科学・応用科学に基づく幅広い多面的な視野と豊かな人間性、社会性、高い倫理性を養い、国際的に活躍できる人材を育成することを目標としています。この目標を達成するため、教育活動に関するPDCAサイクルを構築し、これを稼働させ、不断の改善により、教育の質の向上と保証ならびに教員の質の向上を図っています。質の保証に関しては、すべての学科でJABEE(日本技術者教育認定機構)による認定にむけて教育システムの拡充を進めています。平成18年度には、機械工学科と都市システム工学科、平成22年度には、電気電子工学科、平成25年度には知能システム工学科がJABEEプログラムに認定されました。平成26年度はマテリアル工学科がJABEEプログラムに認定され、平成27年度には生体分子機能工学科、メディア通信工学科、情報工学科の3学科が認定されました。

教員の質の向上に関しては、平成13年度からは、毎年工学部主催でFD研修会を開催してきました。また、平成17年度からは、学部の講義について学生による授業アンケートに基づいて、授業改善のため教員による授業評価を実施しています。さらに、この教員による授業評価は、学期末毎に学科(あるいは分野)主催のFDにおいて検証され、学科カリキュラム全体の点検・評価・改善を含めて、学部統一書式の学科教育点検報告書として提出されています。この方式は、平成18年度からは、大学院前期課程の授業科目にも採用され、専攻教育点検報告書として提出されています。

平成27年度のFD研修会では、「学生のメンタルヘルス」に焦点を絞って筑波大学教授の杉江先生に筑波大学における保健管理センターでの学生相談における現状とその対応についてお話しいただいた。筑波大学でのいろいろな取り組みは本学にも参考になることが多く有意義な講演でありました。次いで各学科長による「修学上気になる学生・大学院生の行動・気質について」というテーマで報告していただきました。詳しい内容は本文を見ていただければと思いますが、各学科での問題意識が良く分かり、情報共有という点で非常に参考になる報告がありました。3時間の長時間に亘り多くの教員が最後まで関心をもって討論し有意義なFD研修会となりました。

本FD報告書に、平成27年度のFD研修会の内容をまとめましたので、ぜひともご一読いただきたく思います。また、内容につきましては、ご意見ご助言をいただければ、今後のさらなる改善に結びつけていきたいと考えております。

工学部長
馬場 充

目 次

工学部FD研修会

【基調講演】

「学生のメンタルヘルスについて」

筑波大学大学院教授 杉江征先生

【パネルディスカッション】

「修学上気になる学生・大学院生の行動・気質について」

生体分子機能工学科長

電気電子工学科長

メディア通信工学科長

情報工学科長

平成27年度 茨城大学工学部 FD 研修会実施報告

茨城大学工学部教育改善委員会

1. 開催日時など

日時：平成27年12月25日（金） 13:00 ～ 15:45

場所：茨城大学工学部 N4 棟小平記念ホール

司会：福元 博基（教育改善委員会委員）

2. プログラム（敬称略）

開会の辞（13:00 ～ 13:05）

教育改善委員会 FD担当

工学部長挨拶（13:05 ～ 13:15）

工学部長 馬場 充

外部講師による基調講演（13:15 ～ 14:15）

「学生のメンタルヘルスについて」（13:15 ～ 14:00）

筑波大学大学院教授 杉江 征 先生

質疑応答（14:00 ～ 14:15）

休憩（14:15 ～ 14:30）

本学教員によるパネルディスカッション（14:30 ～ 15:40）

「修学上気になる学生・大学院生の行動・気質について」

生体分子機能、電気電子、メディア、情報の各学科長

質疑応答および総合討論（15:30 ～ 15:40）

パネリスト：工学部8学科代表者

閉会の辞（15:40 ～ 15:45）

教育改善委員会委員長 池畑隆

【教職員出席者数】 121名

【実施内容】

最初に、馬場工学部長の挨拶があった。今回の基調講演に関連して、人間関係のうまくいかない学生が増えていることや、後半の各学科の学生に対する取り組みが今後の学生指導に有益になることを期待していることなどの話があった。

次に基調講演として、筑波大学の杉江征先生（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授・保健管理センター）から「学生のメンタルヘルスについて」というタイトルでご講演をいただいた。はじめに杉江先生の略歴として、学生相談など多岐に渡る研究を行われており、現在の主な業務は保健管理センターでの学生相談であることが紹介された。



まずはじめに、学生相談とは、新制大学の発足と共に始まり、学生支援（サービス）であったが、現在では教育活動の一環となり、協働と連携が重要な活動となっていること、また、筑波大学における学生相談機関の活動について、学生、教職員、保護者、全学を対象とする活動などが説明された。さらに杉江先生自身の学生相談の基本的なスタンスについて話され、学生相談では「話を聴く」ことが比重が大きく重要であることを説明された。学生本人が自ら解決できるようにカウンセリング、援助をおこなっていき、イメージとしては放牧しながら育てている感じだと話されていた。

次に面接場面での大学生像をキーワードから概説された。「人格障害や発達障害の増加」については、パーソナリティの偏りや発達の偏りによるものであること、また発達障害とは、足が速いなどの一個性と同じと考え、その個別性のサポートを大学がどのように対応するのかが問題であると説明された。「これまでの常識が通じない」というキーワードに対しては、十人十色の背景があるため、よくよく話を聴かなくてはならないと再度強調された。

次に大学生の健康白書 2005 からの学生生活アンケートによる学生の問題の発生について述べられた。学部 4 年間の生活の中で、心理的不調の変化、やりがい・目標などの浮き沈みについて説明され、学生の問題は大学という文脈の

中で起こっており、授業・単位・研究、教職員・友人などの人間関係、進路や就職、経済状況などとの関わりで発生するもの、と説明された。

さらに筑波大学の取り組みとして、「T-ACT（つくばアクションプロジェクト）」について紹介された。例えば対人関係の問題では、うまく交流できない、傷つくのが怖い、などの学生に対して、「自信を育てる」場を与えることが必要である。自分でやって成功した経験や、他者から受け入れられた経験が自信になるため、学生が発案、参加などし易い活動の場を与えるための取り組みを行っている。教職員が一体となって学生の自発的なプランに協力し、学生は発案者（プランナー）やプランへの協力者、参加者などの異なる役割での参加・関わりを持つことの出来る活動となっている。地域社会やOB・OGとのつながりなど想定以上の成果も出ており、学生が大学に「来る」魅力の一つとなっていることが紹介された。



最後に、学生へのサポート方法について話された。学生の不調が顕在化するポイントは単位・成績の状況や友人・保護者などからの相談などあるが、その不調の原因は複合的で推察は難しい。結局のところ、学生本人に声をかける、話を聴くことが大事で、学生を理解することがまず大切であると話された。自分たち（教員）の体験した世界と、学生の体験した世界は必ず違い、学生の話す通りに想像してみる必要があることも話された。

その後、質疑応答の時間が取られ、様々な質問が出された。例えば、学生との相談での会話の仕方や、学生の保護者・両親との教員の関わり方についての質問や、また支援が必要な学生がここ10年ほどで増えているのは何故なのか、との質問がなされ、学生相談について教員も多くの問題意識があることを示す内容であった。



休憩時間をはさんで、本学部教員による講演として、「修学上気になる学生・大学院生の行動・気質について」との内容で今年度は約半数の学科長に報告をしていただいた。各学科の報告ごとに、その都度質疑応答を行い、多くの意見・議論が行われるように進められた。各学科での報告内容および議論の要約は以下のとおりである。

生体分子機能：1～4年の各担任および学科長による意見をまとめて報告された。内容としては、卒研着手条件を優先し、難しい科目を取らない、1時限目の授業を避けるなどの偏りのある履修状況や、研究室に休みがちとなっている学生の傾向として、サークル・アルバイト（特に塾講師）のやり過ぎ、または発達障害などの理由でコミュニケーションが取れない学生が多いこと、また成績不振学生・休学中の学生対応における課題などが挙げられた。



報告に対する意見として、アルバイトの実施傾向との関係性については来年度以降の検討内容にしてはどうかとの意見が出された。また、学習意欲の低い学生（サボり）への対応については、杉江先生より、ただサボっている学生よりも、何らかの罪悪感を抱えたままのサボりは問題で、何らかの悩みがある可能性があるため、よく話を聴いてみる必要があると述べられた。

メディア：茨城大学生の特徴的な問題点として、そこそこの成績を修める多数派学生の気質を次の2点であるとまとめている。1つ目は、出来る限り少なく学びたい。つまり知らなくて済む原理的なことはできるだけ知りたくない、期末試験に使える箇所のみを効率よく学びたい。そのため、根本原理の把握は不要であり、不得意であり、嫌いであること。また2つ目は、「違い」はわかるが「同じ」がわからない。即ち、わずかな相違に気がつくことは得意だが、事象の奥に潜む共通原理を見出すことが非常に不得意である。その結果、本質的にはほぼ同じ、言い回しの変更程度の問題も、学生は新しい問題であると主張する。これらの学生の気質の変革が大切でないかとまとめられた。

報告に対する意見として、学生のこれまで生きてきた教育の結果なので対応は難しい、現在の学生は問題の解き方を習うことを勉強だと思ってしまう、などが挙げられた。また、茨城大学での授業アンケートや教員自己評価などの改善に関する意見も出された。

情報：気になる学生を大勢いる軽症の学生と少数の重症の学生でまとめられている。軽症の学生は、自身で前に進もうとしない、勉学に取り組む姿勢がいかげんである学生で、対策として学期毎のオリエンテーションや、新カリキュラムにより導いていくことが考えられる。重症の学生は、親の期待を受けすぎて親に逆らえず、大学での勉学で不調になっても親に隠してしまう学生で、親の方も子の嘘を信じてしまい、現実との乖離が進んでしまっている。そのため親とどのように対応すべきか、対策は非常に難しいとまとめている。



また、問題のある学生の学科内共有の方法について、各学科に質問され、学科ごとにそれぞれ対応していることが述べられた。その一方で学科を超えて対応する部署などはないため、早めに対応できる箇所を作るべきではとの意見があがった。また、工学部だけが非常に手厚く学生対応しており、教員の負担が大きいことも指摘された。

すでに予定時間を過ぎていたため、総合討論は行わなかったが、各学科ごとの質疑応答において、学生対応に対する教員の問題意識が高いことが伺われ、非常に有意義な議論が出来たと思われる。

最後に、池畑教育改善委員会委員長からの挨拶があった。今回は、学生のメンタルヘルスに関する話題であり、我々教員にとっては不得意な分野となっている。実際に専門家でも難しいとのこと、教員側の対応なども学部、大学での対応を期待する。また、学生と話をしなさい、ということが大事である、との話であった。



以上

文責 尾脇 裕隆（教育改善委員会委員、FD 担当）

○学科FD研修会報告

資料ページ数が多いため、茨城大学工学部学務第一係で閲覧いただくこととし、本報告書の添付は省略します。

茨城大学工学部学務第一係
0294-38-5009